

# 北条政子の巫女語り

——『曾我物語』の八幡信仰——

木村 朗子

はじめに

真名本『曾我物語』は、曾我兄弟の仇討ち、頼朝の英雄譚を語りながら、大磯の虎の往生を最終場面とし、「末代なりといへども、女人往生の手本ここにあり。まことに貴かりし事どもなり。」<sup>1</sup>と語り終えており、女人往生を説く説教譚としてみる事ができる。その中核に虎の存在が注目されてきたわけだが、最後の虎の語りか物語のすべてを包摂するという形にはなっていないため、そこからこぼれ落ちていくようなまとまりきらない断片をいくつも抱え込んでいるというのが真名本『曾我物語』のありようだと見える。そこで本稿ではとくに巻第三の「五障の逆接を許されて、男女の罪惡を擇び給はず」という文言に注目して女人往生をめぐる説教語りについて考えを進めてみることにする。

女人往生を説く上で、「五障の逆接を許されて、男女の罪惡を擇び給はず」というのは、かなり大胆な言いぶりではないだろうか。女人には五つの障り(=五障)があつて予め成仏は阻まれているというのは、『法華経』『提婆達多品』にも説かれるところである。そこでは、「女身は垢穢にして、これ法器に非ず」<sup>2</sup>とされる女人の、そしてさらには龍女という人ならぬ異類<sup>3</sup>のものの成仏は、成仏の直前に男子と成る「変成男子」を説いてようやく可能になるわけだが、しかし真名本『曾我物語』は、その女人の五障を「逆接」だとかたづけ、あっさりとして「許」してしまい、「男女の罪惡を」選ばないのだ、と高らかに宣言してはばからない。「男女」を選ばないのだから、当然そこには「変成男子」の介入する隙もないということになる。そしてこれは神功皇后を主神とした八幡三神を語る中に現れるのである。そこで本稿では真名本『曾我物語』に語られた八幡について、女人往生の語りの問題として考えることを試みる。

## 1. 仇討ち物語——神慮をよむ託宣の語り

『曾我物語』は曾我兄弟の父の敵討ちを語りながら、同時に頼朝の関東制覇を語る。それらを仮に「仇討ち物語」と「頼朝物語」と呼びつけることにする。このふたつの物語は八幡をめぐる抜き差しならないかたちで結ばれている。したがって頼朝物語において八幡神が語られることは、八幡がただ源氏の守護神であるという以上の、物語の構造に深くかかわるものとして考える必要があるだろう。以下にまず仇討ち物語をみていく。

曾我兄弟の仇討ち物語は、兄弟の父助通が、助経によって殺されることにはじまる。この事件は本来、助通の父である助親を狙ったもので、助親に土地を横領されたことが発端となっている。助経、幼名金石の後見を兄助継に頼まれた助親は、自ら「金石殿においては助親かくて候へば後見をば仕るべし。努々疎略の義あるべからず。もし疎略の義あらば、二所・三島の大明神・富士浅間の大菩薩・足柄明神の御罰を蒙るべし」

<sup>1</sup> 本文の引用は、『真名本曾我物語1』『真名本曾我物語2』(東洋文庫)平凡社、1987年、1988年による。

<sup>2</sup> 『法華経(中)』岩波文庫、1964年、222頁。

<sup>3</sup> 山本ひろ子氏は、「提婆達多品」が女人成仏だけではなく龍女の成仏を告げているということ強調して次のように述べる。「もちろん『提婆品』龍女成仏の文言がありていに告げるものは、女人成仏という説相であろう。けれども中世の宗教思维と切り結んでいったとき、龍女成仏というテーゼは、経文のくびきを離れ、女人救済というモメントを超出して、とある途方もない世界を開示していった。その曙光と予兆は、すでに『平家物語』『灌頂卷』のなかに見てきている。龍女の身と化した一門の人々を弔い、ついには『灌頂卷』の最終場面で龍女として成仏した建礼門院。これらの人々の成仏を引導したのは、『法華経』『提婆品』と『龍畜経』なる経巻であった。つまり異類の成仏こそが畜生道の語りの深層に隠されていた最大のモチーフであったことになる。」(山本

と言明する。兄助継の死後、助親は「七日毎の仏事の外になほ種々の善根どもをも修し、四十九日、一百ヶ日、一周忌、第三年に至て追善忠節を尽す。」とある。金石に乳母を付けて養い、「遺言を違へずして」十三歳になると、元服させ宇佐美の宮藤次助経と名乗らせて、娘の万劫と婚合わせ、京都の重盛に見参に入れる。しかし、そのまま助経を都に留め置くことで、「屋敷の一所をも配分」せずに土地を横領したのだと語られる。

この助親の土地横領についての訴えが退けられた助経は、助親、助通親子を誅することを謀り、助通が死すことになる。

助親は、死にゆく兄に「もし疎略の義あらば、御罰を蒙るべし」と誓ったのだから、この事件を約束を破ったために天罰が下ったこととみることもできる。しかし物語は、兄の死後に入念な供養を積み上げた「善根」を語った上で、助親は「遺言を違へずして」、助経を元服させ娘と婚合させたと語っており、むしろ助経の行いについて次のように語ることで天罰説を留保している。

この条において、いかにあるべからむ。神慮もつとも量り難し、冥の照護もおぼつか不審し。縦ひ、限りある道理なりとも、一方ならぬ重恩を忘れて忽に悪行をたく工みて、その身もいかにあるべからむ。七星天に居す、星位順を違へ給はず。堅牢地に居す、地神これを許し給はんや。第一には叔父なり、第二には養父なり、第三には舅なり、第四には元服の親なり。その重恩においては諍ふべからざるをや。  
（「巻第一」21頁）

「いかにあるべからむ。神慮もつとも量り難し」として、いったんことの顛末が投げ出され、さらに助経が、叔父、養父、舅、元服親に背こうとしていることを挙げ連ね、「地神が許し給はんや」とすることで、物語の行方を決する「神慮」はここで更新されている。この後「地神」の神慮の意味づけは、物語る過程に委ねられ、仇討ち物語の最終場面ようやく助経の死として「神慮」が解かれていくことになる。このように神慮というものを折り込むことで、物語を語ることでそれ自体が神のことばを解いていくことになるといった仕掛けがほどこされる。それゆえにこの物語を語ることは、神のことばを受け、その意味を解いていく巫覡の役割を負い、まさに唱導性に深くかかわっていくことになる。本稿では深く触れないが、ここに北斗信仰とといった、八幡信仰と同様に託宣を基盤とする信仰に寄り添って書かれたことには注意していいことかもしれない<sup>4</sup>。宇佐八幡の縁起が『八幡宇佐宮御託宣集』であることによく表されているように、八幡信仰は元来、託宣をこととする巫女に担われてきたということがあった。そうした託宣の語りか物語を語ることと結ばれているのである。

## 2. 頼朝物語——八幡大菩薩への祈念

『曾我物語』を語ることがそんなふうに神との交流を擬態することにあるとして、真名本『曾我物語』の八幡が最初に呼び込まれるのはどの時点であるかを確認しておくこと、助経が助親らを討つように命じた郎従、大見小藤太、八幡三郎の名にある「八幡」にはじまっている。この八幡三郎が助親を狙いそこなった代わりに曾我兄弟の父

ひろ子「Ⅲ [本覚の弁証法] 龍女の成仏 『法華経』龍女成仏の中世的展開」、『変成譜——中世神仏習合の世界』春秋社、1993年、243頁。）

<sup>4</sup>「堅牢地に居す、地神」「七星天に居す、星」と対句的に重ねられた「七星」「堅牢」からは、北斗信仰と結びついた北辰信仰が導かれる。北極星を神格化したといわれる妙見菩薩は日蓮宗の隆盛にともなうて、関東に広まり、とくに千葉氏によって守護神とされたことが『源平闘諍録』から知られる。『源平闘諍録』「巻第五 妙見大菩薩の本地の事」は、妙見菩薩を将門の由緒

河津三郎助通を討つことは意味深長である。というのも、助通の死が明確に八幡への祈請にかかわって語られているからだ。これを祈り上げるのが源頼朝である。

河津三郎助通の誅される顛末は、次のように「一つの不思議」として靈驗奇譚のように語り出される。

ここにまた一つの不思議あり。武蔵・相模・伊豆・駿河、両四箇国の大名たち、伊豆の奥野の狩して遊ばむとて伊豆の国へ打超えて伊藤が館へ入りにけり。助親、大きに喜て様々に賞<sup>もてな</sup>しつつ三日三箇夜の酒宴ありけり。両四ヶ国の人々はかれこれ五百余騎の勢を以て伊豆の奥野へ入りにけり。「巻第一」23頁

諸国大名たちが狩をするあいだに大見小藤太、八幡三郎の計画が果たされることになる。この伊豆の奥野の名所での酒宴には、熊を狩ることと、大石を投げ落とすこと、そして人々による相撲のことなどのエピソードが並行して語られている。これらの「力態」<sup>5</sup>は同時に神事に深くかかわるものとして知られる。その相撲の場で頼朝の祈念は語られているのである。

流人兵衛佐殿は、伊豆の国の住人に南条・深堀といふ二人の侍を御友として御在しけるが、

「哀れなる世の習ひかな。奴原が心のままに扱ふこそ安からね。帰命頂礼八幡大菩薩、願はくは頼朝が思ふ本意を遂げしめ給へ」とぞ祈念せられける。「巻第一」38頁

この相撲の場に、突如頼朝の祈念が差し込まれることで、仇討ち物語と頼朝物語が接するわけだが、半ば唐突な頼朝の登場と八幡大菩薩への祈念は、助経の助親らを誅する思いと重なって、八幡三郎による助通暗殺を完遂させることになる。「帰命頂礼八幡大菩薩」がまったく出し抜けに挿入されることで、助通の死は文脈上、頼朝の八幡大菩薩への祈念に導かれるかっこうになる。

頼朝の「本意」はここには詳しく述べられないが、のちにそれが助親を誅することと関東制覇にあることが語られる。

「道<sup>みちすがら</sup>も御心中に祈念せられけるは、「仰ぎ願はくは八幡大菩薩、頼朝が先祖八幡太郎義家は、男山石清水の参籠の時の示現にて大菩薩の御子となりつつ、八幡太郎と云ふ名を得たり。」<sup>6</sup>とはじまり、次の八幡大菩薩の縁起の、八尽くしの調子のいい語り口へとつづく。

『それ、<sup>おもんみ</sup>以れば八幡大菩薩と申して八の数を官り給ふ事は、諸仏の出世は必ず八正道あり。教化衆生の法、仏法東漸の宗教は八宗にして八教の宗義なり。釈尊出世の本懐は八箇年の説教、それまた一仏乗経は八軸の妙文なり。弥陀如来は八種の功德を以て浄土を莊嚴し、八正宝階は八大菩薩遊び給ふ。宝池の岸には八功德水波を寄す。宝樹林には八種の清風梢を渡る。八珍の宝座には八種の音楽声を響かすなり。また聞く、日月灯明仏には八人の王子、薬師如来には八大菩薩、転輪聖王には八珍の床、厭ふべきは八寒地獄、恐るべきは八熱地獄、悲しむべき

として位置づけ、千葉氏の代々の守護神として示す。しかし、その根ざしは、道教にあり、筑前福岡県嘉穂町が北斗宮をもつなどから、八幡宮と圏域を同じくするといわれる。中野幡能氏は、宇佐神宮に伝わる神像について、道教的北辰神に、弥勒菩薩の半跏思惟像が重ね合わされた、道仏融合の姿だとし、「北辰神に変容した秦氏の崇拝する神」として位置づけ、「原始八幡神」(彌秦神)と呼んでいる。(中野幡能「八幡信仰の源流」、『八幡信仰事典』或光祥出版株式会社、2002年。)

<sup>5</sup> 曾我兄弟の仇討ち物語の前史におかれた父殺しは、狩場である「山の案内者」(72頁)と呼ばれる八幡三郎によって敢行される。のちに曾我の敵討ちの物語のプロットにとってきほど重要とは思われないにもかかわらず、敵討ちの物語を先送りしながら、延々と展開されるストーリーが狩の場面の反復であることなどの一つ一つが山岳修験道に育てられた八幡信仰の問題系に結ばれているのもまた奇妙な一致である。

<sup>6</sup> (つづき) されば八幡太郎よりして、子孫に惹<sup>つら</sup>あらせじとこそ御誓はあんなるに、忝くも御本地は無量寿仏これなり。されば大菩薩の記文を見るに、御誕生の時は八つの幡五色にして天より雨り下る故に、行教和尚はこれを讀して云はく、……(「巻第二」104頁)

は八難処、歎くべきは八忍八智、行ずべきは八解脱、大仲臣経には八万神たち高天原に留まり、天の八重雲に在して伊豆の千分けに千分け給ふ。<sup>そきのをのみこと</sup>素盞烏尊と云ふは「出雲八重垣妻込に」とて云ひ給へり。日吉の社には八王子、鹿嶋の宮には八龍神、伊豆・菅根の両社には八大金剛童子なり。これらの義を以て思ふに、八幡大菩薩は八大明王を遣はして八苦の我らを守護し給ふ。八大神の加護を以て八色輪の内に籠るなる我らを導き、生死流転の凡夫を救ひて八苦の愛河を濟渡し、流来生死の苦を抜いて八正の直路に入れ給ふ。八幡と云ふ神号をば方取り給ふにこそ。『巻第二』104-105頁)

八尽くしの語りは『神道集』や『源平盛衰記』などにもみられる典型的な語り口だが、弥陀如来から、高天原の八万神<sup>やおよろづのかみ</sup>まで、そして、日吉、鹿嶋から、伊豆・菅根までも、八幡大菩薩の「八」の数の中にひたすらに折り込んでいくのは、仏教と神道と、巫覡の道教的な信仰がひとつに入り交じった八幡の状況の表出であるとともに、あらゆる神々を八幡神の下位に位置づけていこうとする『曾我物語』の意志でもある。

これに、「頼朝既に末世に及びて、東国に住して今この苦に合へり。そもそも八幡大菩薩の御願には、『我必ず東国に住して東夷を平らげん』とこそ誓ひ御在す。」とつづく。

しかるに源氏皆亡び<sup>は</sup>了てて頼朝一人になれり。家廢れ人亡びて、正統の名残としては頼朝ばかりなり。八代守護の御誓空しくして四代を残し給はむこと口惜しかるべし。今度運を開かずは、いづれの人か家を興して誓を継がむ。既に世澆季に臨み、また後胤なし。仰ぎ願はくは八幡大菩薩の誓約をば頼朝に施し給へ。伏して乞ふ。諸大冥官擁護を垂れて幸徳を授け給へ。縦ひ広く東国を究げむ事こそ難くとも、当国の土民ばかりを授け給へ。運墳の腹を断て愁苦の悲しみを除かむ。愛子の敵伊藤入道が首を取て我が子の後生の身代りに手向けむ

とぞ祈念せられける。八幡大菩薩も争かこれ程なるに影向もなからむや。(『巻第二』105-106頁)

八幡太郎義家が男山石清水で元服したという由緒に基づく頼朝の祈念は、八幡大菩薩の長大な縁起語りを経て、傍線部「八幡大菩薩も争かこれ程なるに影向もなからむや」と結ばれ、八幡大菩薩の影向を物語は一応の予言とする。

頼朝の念じたことの一つは伊藤助親を倒すことであつたが、これは八幡三郎によって半ば成就をみている。いまひとつの関東制覇の行方がここでは未来に解かれるべき神慮として残されたわけだが、これを解くのが頼朝の北の方、北条政子<sup>7</sup>なのである。

### 3. 北条政子の巫女語り

「巻第三」で、伊豆の目代泉判官兼隆に嫁がされた政子は、頼朝のもとへ逃げゆく。兼隆が頼朝との合戦をしかけてこようというとき、密厳院の律師が大衆を集め、次にあるように、伊豆の走湯権現と頼朝の先祖、八幡大菩薩との連関を説きながら、頼朝に加勢すべきことを語る。

<sup>7</sup> 物語には「北条のムスメ」、「北の方」とあるが、本稿では便宜上、北条政子と呼びなしておく。

「されば当山に八幡の御社あり。水尾の清き御流れなれば、八幡大菩薩も、当山住持の三宝も、当山守護の走湯権現も、争か捨て奉らせ給ふべき。我が山の古を思し食さば、権現も定めて加護し給ふらむものを。

されば権現は我らに神力を与へ、我らはまた源氏を守りて佐殿を助け奉らむ。源氏の跡永く絶えずして久しく祈禱を致す。もし我が山繁昌すべくんば、大衆たち一同に、山木が梟悪を防ぎ、源氏の怨敵を平げて、末代の栄耀を待ち給へや」(「巻第三」147-148頁)

傍線部「八幡大菩薩も、当山住持の三宝も、当山守護の走湯権現も、争か捨て奉らせ給ふべき」に導かれるようにして、目代山木判官兼隆が攻め込むのを断念したことが語られる。

これに力を得た頼朝は「願はくは、大悲権現八幡大菩薩、頼朝が思ふ宿願を、遠くは三年、近くは三月の内に成就せしめ給へ。もし我が願成就する程ならば、先づは山木を亡ぼして、次には伊藤を討たん」とぞ祈念せられける。」として、再び大菩薩への祈念を更新する。

この後、頼朝は政子とともに精進潔斎し伊豆山権現に参籠するわけだが、これについて物語は「佐殿の御祈請よりも、殊に北の方の御祈請こそ、外にて承るに、随喜の涙も留まらぬ。」と語り、政子を予め優位においている点に注意したい。

政子の礼拝は、暁を過ぎて「御珠数を搏みて、「咬苦しや」とて、さも苦しげなる御声付きにて」と、神に憑依されて「そもそも、当山と申すは、走湯権現これなり。…」のように縁起を語りだす。「御誓まことに平氏の女が宿願に違はずんば、忽に成就せしめ給へ。将亦、源頼朝が年来の念願をば速かに満足せしめ給へ。(中略)……況んや我ら夫婦、俱に精進潔斎にて丹精を神前に至して、降伏を宝殿に乞ふ。」として「もしまた愛夫頼朝の果報拙くして、この願成就すまじくは、事を起さぬその前に自らが命を召せ」と、命を引き換えにした壮絶な祈りを捧げる。続けて神によみかける歌が、「且く有て、御戸帳の内より覆しき風俄かに吹き来りて、気高げなる御声付き」の神との歌の贈答を引き出している。それに対して物語は「この御歌を承りて、人々は身の毛弥立つて、随喜の涙肝に染む」と添えている。

次に政子に導かれるようにして、頼朝も神との歌の贈答を果たすが、「北の方の御祈請かくの如し。況んや佐殿の」として、頼朝の歌の贈答は北の方を指標にして語られ、神の声についても、「これも先の如くに覆しき風吹て」のように、政子の贈答歌を指示しながら語られている。

政子による神との交信は、まず政子の声色を変えて「当山」の縁起を語らせ、さらに呼びかけから神の声を引き出し、政子を巫女へと位置づける。これにつづく、夢合わせの場は、藤九郎盛長、頼朝、北条政子の三つの夢を書き留めている。盛長の夢は、「君の御ために屹ぎ御示現を蒙りて候ふなり」といって、吉夢としてのみ、とりあえず投げ出されてある。次に、頼朝が自らの夢を語り「八幡大菩薩の守り給ふやらむと憑しく覚ゆる」と語る。つづく北条政子の夢は、最後に政子自身のことばによって、「いか様にも殿の御代の後は自ら將軍家の後家として、日本国を知行すべきや」と解かれる。このことは「これ程に打話き御祈請の候はんには、権現も争か御受納なかるべき」と異口同音に感じて申し合へり。」として、先の政子の祈請と因果づけられて、

政子の知行を「承久の兵乱」などを例にだしながら讃え、さらには次のように添えることで、物語の時間の外側から確定的に語り加えている。

されば平家に曾我を副へて渡したりけるに、唐人これを披見して、「日本は小国とこそ聞きぬるに、かかる賢女ありけるや」と感じ合へりけるとかや。日本・唐の兩州において、賢女の名譽を施して、末代の女人のためには有難かりし手本なり。（『卷第三』157頁）

その後、懐嶋の平権守景義の夢合わせがあつて、頼朝の未来を「主上・上皇の御後見とならせ給ひて、日本秋津嶋の大將軍とならせ給ふべき御示現なり。」と解くが、しかしそれはすでに政子のことばによって「殿の御代後は自ら將軍家の後家として」のなかに解かれてあつたことであり、政子の夢解きにつづけて、すでに物語は頼朝の死後、政子を日本国の賢女として語るに至っているわけで、つまり、この叙述において夢合わせを真に解いたのは、政子で、景義の夢解きは実はすでに既知のことを語りなおしているにすぎないという意味で、夢解きとしては無効化されている。物語は神に憑依される政子の巫女的な力を描き込むことで、政子が知行することの資質に結び、それを女人の手本としているのである。

頼朝の関東制覇が果たされると、それを「伊豆の御山にて藤九郎盛長が見たりし夢相に違はず」と述べ、伊豆の夢合わせに結び、そこから鶴岡八幡への八幡大菩薩勧請の話題に転じている。そこで語られる八幡三神は、以下のとおりである。

八幡大菩薩とは、忝くも本地寂光の都を出でて、垂迹の三所と顕れ給ふ。人間皇女の胎生を借りて、即ち本朝三代の皇帝と生れ給ふ。その三代とは、仲哀・神功・応神等なり。崩御の後は皆本朝守護・百王鎮護の一所三躰の垂迹と顕れ給ふ。その三躰とは、弥陀・観音・勢至の三尊なり。（『卷第三』171頁）

これについて「中の御前と申すは、即ち弥陀如来これなり。本朝誕生の御時は神功皇后と申す。」「左の御前と申すはまた、観世音菩薩これなり。本朝誕生の御時は仲哀天王これなり。」「右の御前と申すはまた、勢至菩薩これなり。本朝誕生の御時はまた、応神天王これなり。」と語られ、神功皇后を本尊とした、仲哀・応神の三神をあげ、独自の八幡信仰が提示される。

そもそも八幡大菩薩は、応神天皇に置かれるのが広く一般的である。しかも「卷第五」の鷹狩り問答で、畠山重忠が「八幡大菩薩は我朝の帝にて御在せし古は鷹神天王と申す。その第四の王子をば、仁徳天王と申しける。」と語っているところを見ると、『曾我物語』の内部においても八幡大菩薩の解釈には揺れがある。

『八幡愚童訓』の三神も応神天皇をいちおうの主神にしている。ただし、『八幡愚童訓』甲本は「<sup>そも</sup>抑八幡大菩薩者、仲哀天皇第四御子、御母儀ハ神功皇后ニ御坐ス。」<sup>8</sup>として応神天皇を主神におきながら、一方で、神功皇后を阿弥陀如来の化身としてもいて、神功皇后を中の御前とする『曾我物語』の形式に添うような、神功皇后を主神に押し上げる力を潜在させてもいる<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> 『八幡愚童訓』甲本の本文は、『日本思想大系 寺社縁起』岩波書店、1975年、178頁による。

<sup>9</sup> 『八幡愚童訓』甲本と真名本『曾我物語』とは、たとえば八

神功皇后ハ阿弥陀如来ノ变化ニテ坐バ、六八超世ノ悲願ヲ発シ、沈倫苦海ノ衆生ヲ救ヒ給ハントノ、法蔵ノ昔ノ誓ヲ思食シ忘レズ、四十八艘トゾ定メケル。」<sup>10</sup> (『八幡愚童訓』(甲) 172 頁)

神功皇后は阿弥陀如来の化身であつて、大無量寿經に説く阿弥陀仏が法蔵比丘と称した昔に、一切衆生をすくうために発した四十八の誓願を忘れず、四十八艘の船を出兵にさいして用意したというのであるが、ここで神功皇后が比定されるのが仏像の三尊形式において中尊に位置する阿弥陀如来であることで、神功皇后の本尊=主神たることが主張されることになる。

八幡三所として仲哀天皇、神功皇后、応神天皇を説くこと自体、八幡神の縁起においては比較的新しいことに属し、八幡三所は神功皇后、姫大神、応神天皇として長く伝承されてきた。多くの現存する八幡三神像も応神天皇を主神として、二女神を添える形式であるが、『八幡愚童訓』乙本も「八幡三所と申は、中は第一大菩薩、応神天皇、又は菅田の天皇とも申也。右は第二姫大神。左は第三大多羅志女、神功皇后、又は氣長足姫尊とも申也。」<sup>11</sup> とした上で、「但姫大神をのぞきて仲哀天皇、又は足仲彦天皇と申をいはひ参すといへ共、たしかならず」のように、姫大神の代わりに仲哀天皇を加える説に不審を表明する。

中野幡能氏によれば、八幡大菩薩をたてて、二神を付随させ八幡三所として祀られる形式において、八幡大菩薩に応神天皇を置くこと自体、宇佐八幡が大和と合流してはじめて発生したものだという。宇佐八幡神は、秦氏系辛嶋氏・宇佐氏・大神氏のそれぞれの信仰の混合形態として成り、託宣をこととする新羅国の信仰を持ち込んだ秦氏系辛嶋氏が強く影響する場に、大和から派遣された大神氏が参与することによって応神八幡が成る。八幡神は、本来、朝鮮半島から渡来した秦氏系の氏族と思われる辛嶋氏の祀っていた「ヤハタ神」を、大和から派遣された大神氏の祖・大神比義が持ち込んだ応神天皇を上乗せしたという経緯があつたとみられている<sup>12</sup>。

中世には応神天皇を主神とすることはほぼ確定していたわけで真名本『曾我物語』と共通文化圏でつくられたといわれる『神道集』も、応神天皇と二人の女神をあげているが、それでも神功皇后が主神としてのし上がってくるような潜勢力を八幡信仰は持ち続けている。それが中世に整備された『八幡愚童訓』のある挿話に、あるいは真名本『曾我物語』に突発的に浮上してきているのである。ともあれ真名本『曾我物語』が神功皇后を主神に押し上げる意図は、政子に重ね合わせるためだということが明確にあつた。『曾我物語』「巻第三」のはじめにすでに次のようにある。

掛けまくも忝くも、異国の則天皇后は夫を重くして位に即き、本朝の神功皇后は夫の仲哀天王の別を悲しみて遺跡を尋ねつつ、女性なれども世を取らせ給ひつつ、日本国の皇帝とはならせ給ひぬ。今の北条の妃も女性なれども、日本秋津島、鎌倉の受領仁、將軍家の宝位・玉床に御身を宿し給ふべき御瑞相にや、(「巻第三」142 頁)

神功皇后は『古事記』『日本書紀』の伝承において、仲哀天皇の後として、武内宿禰とともに託宣を伝える巫女的存在であつた。政子が、頼朝の関東制覇を告げ、頼朝

幡神を中心に据えて、その下位に他の神々を繰り込もうとする語り口においても通じ合う。『八幡愚童訓』甲本は「宝満大菩薩・河上大明神ハ、皇后の御妹ニ坐セバ、女人ノ御身ナレドモ、弓箭甲冑ニ携リ同ク伴給ケリ。諏方・熱田・三嶋・宗像・巖嶋明神達、都合三百七十五人、志賀ノ嶋ヨリ四十八艘ノ御船ニ乗給。此三百七十五人ハ一艘毎ニ身ヲ変ジ、同身ナル人一艘ニ三百七十五人御坐ス。此内掘取ニハ志賀嶋大明神、大將軍ニハ住吉大明神、副將軍ニハ高良大明神也。」(甲 175 頁)として、神功皇后の出征の供というかたちで(あるいは阿弥陀如来の眷属というかたちで)、八幡信仰の傘下にさまざまな神々を取り込んでいく。

<sup>10</sup> 表記の便宜上、返点などの箇所は読みくだして語順を変えた。

<sup>11</sup> 『八幡愚童訓』乙本の本文は、『日本思想大系 寺社縁起』岩波書店、1975 年、211 頁による。

<sup>12</sup> 中野幡能「八幡信仰の源流」、『八幡信仰事典』戎光祥出版株式会社、2002 年。

の死後、「女性なれども世を取らせつつ、日本国の皇帝」なったことは、巫女かつ女王としての神功皇后が仲哀天皇の死後、その託宣の内容を果たしに新羅へとでかけるという事跡の上に明確に重ねられてある。

こうして神功皇后を主神にとりこみながら、冒頭に挙げた「五障の逆接を許されて」の文言は説かれるのである。女人である神功皇后を弥陀如来と位置づけ、「奈梨の衆生は忽ちに出離を得て、鉄湯の群類はことごとく極楽に預れり」として衆生を地獄から救い出し、「五障の逆接を許されて、男女の罪惡をえらびたまはず。十念また利益を蒙りて更に邪正を弁へず」、「九品の羨ひを撰す」として、男女、邪正をとわず、極楽往生の願いをききいれてくれるという。これらは『神道集』に類似の文言があるので、真名本『曾我物語』ではこのようなことばを吸収しながら、神功皇后と北条政子を重ね合わせることによって、女人往生を説く八幡信仰というものを立ちあげていく。それは中世に女帝の兜率天往生を描いた『我身にたどる姫君』や尼寺の復興のなかで女帝や皇后の物語が再整備されるなかであって、女人往生を説くために神功皇后を女帝に持ち上げていくような流れに位置づけられるものではないかと考える。『曾我物語』の八幡信仰とは、そうした女性の問題にかかわるものとしてある。一方で、権力者が宇佐の地と結ぶことを政子を語る物語もまた目指しているのであろう<sup>13</sup>。

神功皇后が八幡大菩薩となったことから、それになぞらえられる政子もまた、八幡信仰の中核にとりこまれることになった。『曾我物語』の唱導としての語り手として、虎の存在がこれまで議論されてきた。虎の語りが御靈にかかわる兄弟の物語の中核にあるとすれば、八幡信仰をめぐる政子にかかわるまた別な語りが想定されてよいだろう。『曾我物語』が『吾妻鏡』と並んで、北条方を言祝ぐものとして用意されたという指摘によれば政子に添う語り手の存在はほとんど自明といえるかもしれない。しかしその語りは、単に北条氏とかかわるというふうにあるのではなくて、八幡信仰を説きながら、そこへ政子を置くという仕方がかかわっている。八幡語りのなかに政子があり、そして女人の往生があることを思えば、それがまさしく真名本『曾我物語』の八幡語りの問題を説明する手だてとなり得るといえるだろう。

<sup>13</sup> 政子は「北条の先腹の妃君万寿御前」として登場し、いつのまに「北の方」と呼ばれるようになるが、先の伊豆参籠の請願においては「御誓まことに平氏の女が宿願に違はずんば、忽に成就せしめ給へ。将亦、源頼朝が年来の念願をば速かに満足せしめ給へ。」のように、自らを「平氏の女」と位置づけている。平氏の娘が、源氏の宿願を祈禱するという関係は、新羅の討伐を、新羅系の巫覡が祈禱する関係にどこか似ている。八幡宮もまた、平家守護の関係を結んでいたのだが、元暦元年(1184)7月6日に、緒方惟栄、白杵惟盛、佐賀惟憲らによる宇佐宮強襲を経て源氏の守護神へと決定的に書き換えられることになる。これに先立って宇佐八幡の加護を平家が失うことを物語が予言的に描き込んだ逸話が『源平闘諍録』「大菩薩一首の御詠に云はく、世中濃宇佐神無物何祈覽心尽尔」(『源平闘諍録』(下)講談社学術文庫、2000年、234頁。)'『八幡愚童訓』甲本平家ノ一類、筑紫ニ下リ宇佐宮ニ参テ、「今一度都へ帰シ給へ」ト、種々の立願アリシ時、世中ノウサニハ神モ無キ物ヲ何ニ祈ン心ヅクシニ此御詠、御殿ノ内ヨリ聞ヘシカバ、弱リ果ヌル秋ノ暮哉トテ……」(198頁)にみられる。宇佐という八幡の霊地は、源氏にとっても平氏にとっても極めて重要な位置を占めていたことがわかる。